



Vol.49

## 机の上の小さな変革



## 既知と未知の遭遇

こんにちは、菅俊一です。今回は、既知の情報を利用して未知のものを生み出すということについて考えてみたいと思います。

まずは、食材の名前を10個程度書き出してみてください。果物でもハムのような加工物でも、どんなものでも構いません。ただし、1つだけ条件があります。「自分が味をちゃんと想像できるもの」で、なるべく多様な食材を書き出してみてください。



いかがですか？ できれば、A+Bという形式で言葉を組み合わせていきたいです。Aには先ほど書き出していた食材の名前のなかから1つ選んだものを入れ、Bには「ジュース」「ジャム」「大福」「茶」「の炊き込みご飯」「の天ぷら」から1つずつ順番に選んで入れてみてください。たとえば、書き出した食材のなかから「イチゴ」を選んだ場合は、「イチゴジュース」「イチゴジャム」「イチゴ大福」「イチゴ茶」「イチゴの炊き込みご飯」「イチゴの天ぷら」という単語の組合せができあがることになります。

こうやって組み合わせて書き出してみると、その単語を見た瞬間にある程度味が想像できるのではないのでしょうか。先ほどのイチゴの例だと、当然イチゴジュース、イチゴジャム、イチゴ大福はすでによくあるものなので簡単だと思うのですが、イチゴ茶、イチゴの炊き込みご

飯、イチゴの天ぷらといったものについても、美味しいかどうかはさておき、どんな味がしそうかは思い浮かべられると思います。

このように、いくつか書き出した食材の名前とこちらで用意したものを強引に組み合わせながら、いろいろと味を想像してみてください。きっと「これまでまったく食べたことがないけれど、何となく想像できる新しい味」に出会えるのではないかと思います。

## 既存の知識を使って未知なるものを生む

今回やっていただいたことは、すでに知っている食材の味と料理や加工方法を言葉として組み合わせること、未知の味（料理）をつくるというものでした。私たちは、いきなり未知の事物を想像することは非常に困難です。しかし、既知の事物については様々な経験を持っているので容易に想像できますし、想像のなかではそれらを組み合わせてみることもできます。何もないところから未知なるものを想像できなくても、既知のものを手がかりにすることで想像できる可能性があります。

現在注目を集めている画像生成AIも、基本は人間が既知の言葉の新しい組合せをつくって命令を出すことで未知の結果を得るという意味では、実は同じことをやっています。つまり、既存の知識を使ってどのような新しい組合せをつくり出せるかが、いま、人間の創造性として問われているのかもしれません。

## PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。